

生まれは南 最後は北 —いも男爵 川田龍吉—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

北海道は日本一のじゃがいもの産地で全国の生産量の約80%を占めている。圧倒的なシェアを誇るようになったのは決して偶然ではない。全国屈指の有名ブランドである男爵いもの生みの親として川田龍吉(1856-1951)は北の大地における農業近代化の先駆者となった。

造船事業の有能なエキスパートである川田は経営不振の函館ドックの再建を託されて北海道に移住する。港町の函館の風景は若き日に留学していたスコットランドのグラスゴーによく似ていた。そこで好んで食べた皮つきの熱い焼きじゃがいもの味があらためて甦ってきた。

忘れられぬ思い出の味をもういちど再現してみたい。その並々ならぬ熱意が川田の開拓精神に火をつけた。

造船業の将来を担って

川田は土佐藩士の長男として現在の高知県高知市で生まれた。明治維新以前の川田家は半農半武の郷士の身分で幼い頃から農作業を手伝っていた。

父の小一郎は親友の岩崎弥太郎を支えて三菱商会の創業に携わり、のちに日本銀行第3代総裁となる。日清戦争が勃発したとき戦費調達に才覚を発揮して男爵の爵位を与えられた。

一家の上京に伴い川田は慶応義塾医学所に進学する。だが三菱商会の幹部である父の強い意向で自主退学し、造船業の盛んなスコットランドに留学する。三菱商会は明治政府の軍事物資の輸送を

一手に引き受けて躍進し、海運が最大の主力事業となっていた。川田は海運業に欠かせない造船業の将来の担い手として21歳で海外に旅立つ。

留学生活は1877年から7年間に及んだ。造船技術で定評のあるグラスゴー大学で鑄造から製図まで最新の船舶機械工学を学び、造船所に通って実践的な船用機関術を身につけた。レンフリー造船所が発行した技術証明書には「彼は第一級の技能者であると同時に優秀な設計者であると信ずる」と明記されていた。

帰国後、三菱製鉄所に三等機関士として入社。続いて日本郵船に機関監督助役として出向する。1893年、横浜船渠会社いわゆる横浜ドックの取締役に就任し、第一線で船の建造・修理・検査などを指揮した。私生活では同郷の楠瀬春猪と結婚して5男2女をもうける。

1896年、日銀総裁の父が急死し、40歳で男爵の爵位を受け継いだ。翌年、横浜ドックの社長に就任し、在任中に全国初の石造りドックを完成させるなど先進的な仕事ぶりで評判を呼ぶ。

1902年、アメリカから輸入したロコモビル社製の蒸気自動車を購入し、通勤の際に運転する。



川田龍吉

それまで個人で自動車を所有した前例はなく川田が日本最初のオーナードライバーといわれている。翌年、社長の座を退き、軽井沢で農園を開いた。

アイリッシュ・コブラー

1906年、日露戦争後の不況で経営危機に陥った函館船渠会社を再建するために弟の豊吉を連れて北海道に渡った。経済界の巨頭である渋沢栄一らに請われて専務取締役として赴任する。

函館ドックの仕事の傍ら川田は近郊の七飯村で農地を取得し、新たに清香園農場を開設した。ここでさまざまな品種のじゃがいもを試作する。

じゃがいもはオランダの商船によって16世紀に長崎に持ち込まれたと伝えられている。インドネシアの首都ジャカルタ経由で伝来したことから、ジャカルタいもがじゃがいもの語源だという。

北海道では探検家の最上徳内が北千島から幕末に持ち帰ったロシア産のじゃがいもを函館近郊で栽培したのが最初の試みといわれている。明治になって官庁の開拓使が導入した品種はすべて北米産でアーリーローズやスノーフレークは飢饉に喘ぐ道民の主食代用品となった。ところが1880年代に全道的に病虫害が発生し、とくにアブラムシ類による萎縮病が深刻な被害をもたらした。

四面楚歌の状況を打開しようと川田は海外から取り寄せた農業専門書を読みあさった。そしてアイルランドの靴屋・靴職人と名づけられた新種のアイリッシュ・コブラーが粒大にして味もよく、病虫害に不死身なほど強いことに着目する。

さっそくアメリカのバーバンク種苗会社からアイリッシュ・コブラーを輸入し、全道初の試作実験を開始した。1908年から4年間にわたる試行錯誤の結果、病虫害に強いだけでなく生育が速くて夏の短い北海道に適し、味も格段によいというメリットを実証する。これを聴いて入手希望者が徐々に増え、やがて全道に波及し、川田の功績を讃えてアイリッシュ・コブラーは男爵いもと呼ばれるようになる。凶作に苦しんでいた人々は後年、感謝を込めて七飯町の清香園農場の跡地に「男爵いも発祥の地」の記念碑を建立した。

約5年かけて函館ドックの建て直しに成功した川田は退任後も東京には戻らなかった。在職中か

ら「生まれは南、最後は北」と語っていたように北海道に骨を埋めるつもりでいた。

語りつくせぬ想いを

本格的に農業に専念しようと川田は現在の北斗市の渡島当別にある山林農地を譲り受けて試験場を兼ねた近代的な農場を新設した。ヨーロッパ型機械化農業をめざしてトラクターなどの最先端の農機具を輸入し、牛舎やサイロなどの施設整備に精を出した。川田が農場に現れると村人たちは一斉に沿道に並んで出迎えたという。

1913年、殖産＝産業振興を目的とした会社組織として恒産組を設立し、酪農、畑作、林業、海運などに手を広げ、海外からさまざまな種苗を輸入した。川田農場は開拓精神のシンボルとなる。

1928年、男爵いもは道庁から優良奨励品種に指定された。1932年の全道農産物品評会では晴れの第1位を獲得。一躍脚光を浴びた川田は農業指導のために道内各地を奔走する。戦後の1947年には函館市の五稜郭公園に北海道帝国大学総長の筆による「男爵いもを讃う」と誇らしく謳った記念碑が建てられた。

92歳のときトラピスト修道院で洗礼を受ける。じゃがいもの白い花が咲く季節になると村人たちの担ぐ駕籠に乗って可憐な花びらをうれしそうに眺めていた。3年後に95歳の長寿で永眠する。

他界後しばらくして金庫の中から一束の金髪と89通に及ぶ英文の手紙が見つかった。留学時代に出会って恋仲になった書店員ジェニー・イーデーのものだった。手紙には川田への愛の言葉が綿々と綴られていた。

ふたりは熱烈な恋愛の末に結婚の約束を交わす。だが武士気質で厳格な父の猛反対によって夢は破れる。それから二度と会うことはなかった。

留学中はジェニーと農村を訪れてじゃがいも畑を眺めたり、グラスゴーの街かどでじゃがいもを食べたりするのが何よりの楽しみだった。

晩年に洗礼を受けたのは敬虔なクリスチャンのジェニーに対する懺悔だったのかもしれない。「会うときは語りつくすと思えども別れになれば残る言の葉」と言い遺した川田は男爵いもに語りつくせぬ想いを込めた。